

アフリカ生活に慣れてきた頃、“サファリ”へ出かけた。車で、動物のいる国立公園を駆け巡るあれである。動物園では見られない野生動物の野生の姿を見られる機会とあって、とてもわくわくして出掛けた。“サファリ”はスワヒリ語で、“旅行”を意味する。確かにその広さは、旅行と呼ぶのにふさわしく、ただただ広いサバンナが続く平原を柵で囲い、人間との居住区を分け、その中を車で駆け抜けるというものだ。

ケニアには全部で50の国立公園と国立保護区があり、その中でも一番歴史があるのがナイロビ国立公園である。首都ナイロビの目と鼻の先にあり、車で20分も走ればその入り口にたどり着くことが出来る。野生動物ごしに、ナイロビの町並みを写真に収めることも出来る近さだ。私は、このナイロビ国立公園とナクル国立公園の2ヶ所を訪ねた。

“動物は、どんなだった？”

“どんな動物がいるの？”

“キリンはどのくらいの背の高さなの？”

“サイはどのくらいの大きさなの？”

動物見学旅行から戻った私は、子供たちから質問攻めにあった。「えっ？」と思った。車で行けばすぐそこにあるたくさんの国立公園。私にしてみれば、千葉に住んでいて東京ディズニーランドへ行ったことがないという感覚に近いのかなと、考えていた。近すぎる故にいつでも行けるから行ってないだけのことだと。しかし暫く経てみると、私のサファリの話を共有できるのは、私の周りにいるケニア人には一人もいなかったのである。もちろん、その他のケニアに住む日本人を含む外国人とは、どこのサファリで、こんな動物を見たとか、ガイドが良かったとか、話が弾むことはたくさんあった。

ケニア人を含めアフリカ人にとって野生動物とは？国立公園とは？そんな疑問が浮かんた。国土の10%をも占める公園の広さ。その自然の豊かさ。



ナショナルパークの入り口

外国から来た旅行者を圧倒的に魅了するその自然。しかしそれを保有するアフリカ人と、そこを訪ねる外国人とでは考え方に違いがあることが分かる。

まず、地元のケニア人はサファリに行かないのか？行けないのか？答えは、行けないけど、行きたいと思わないではないだろうか？まず、足がない。国立公園の入場は、四輪駆動の車しか入場できない。車を持っている、しかも4WDを持つ地元ケニア人はどれくらいいるのか？ほとんどいない。次に、メンバーズカードを作らなければいけない。このカードはどこのナショナルパークでも共通であるが、最初に会員費を納めなければいけない。そして入場料は、ケニア人と外国人で違っている。日本円にしてみれば安く感じるとはいえ、地元の人にとっては決して安くはない。つまり、①4WDの車を持つ人、チャーターできる人②メンバーズカードを作るお金のある人③入場料を払える人となるとほとんどが外国人に限られてくるのである。

そして驚いたのが「なんで動物見たいの？」という素朴な疑問である。「なんで、かな？」と私は返事にとても困った。子供の頃より遠足などで動物園に行き、動物を見てわくわくしたのを覚えている。しかも野生動物を、折の中に入っていない動物を近くで見ることができる。「好奇心」以外の何者でもない。実際、キリンが群れで歩いてくる姿がまるで電信柱が規則的に自分の方に向かってくるようでドキドキしたこと、学校の教室ほどの大きさのサイの



ナクル国立公園のサイ

お母さんが、子供を守ろうと威嚇してきたときの恐怖、ガゼルの群れが車に驚いて逃げていくときの美しくジャンプするうしろ姿、フラミンゴが一斉に飛び立っていくその音。外国人観光客の心を打つ衝撃的で感動的なシーンである。吹き抜けるサバンナの風に吹かれながら自分も自然の一部であることを実感できる感動的な時間である。

でも、それはまさに「私たちににとっての」感動であり、喜びなのである。だから、「何で動物を見たのか」という問いにはアフリカ人にとっては「変わってるね～」という感情も多少は含まれているように思う。その感情の背景には、野生動物は恐ろしい存在という認識がある様に思う。国立公園と人間の移住地を分けるのは、鉄製の柵である。問題は国立公園ではないところにも、野生動物は生息していることだ。私も、歩いていて何度かガゼルの群れやダチョウが走っているのを見かけたことがある。(ナイロビの街中ではないが)

アバディア国立公園の近くに畑を持っていた旦那のおじいさんの話に聞いたことのある話がある。夜、バナナの木が大きく揺れ、倒されていく音を聞いたおじいさんは泥棒かと思ひ斧を手に畑に出た。そこで見たのは、畑を荒らすメスの象一頭。おじいさんに気が付き、視線を合わせるために、かがむような姿勢をとってきた。目が合った。その恐怖は言葉には表せないという。ケニアが独立するとき戦士として戦ったこともあるおじいさんであるが、今でも一番怖かったことは、この深夜の象と遭遇であると言う。

アフリカの人にとって、野生動物は時に畑を荒ら



ナクル国立公園のフラミンゴ

し、人をも襲う恐怖の対象でもあると同時に、観光客を魅了するサファリとしての外貨を稼ぐ手段。また、その肉や象牙を高値で売ることの出来る密漁の対象。動物を愛でて、野生はどのようなものかという感動の対象ではないことは私にとっては驚きではあるが、住んでいる人たちにとっては当たり前の感情であるのだろう。

さてナイロビには、野生動物の肉を食べさせてくれる政府公認の“カーニバル”という名前のレストランがある。そこでは、シマウマ、インパラ等野生動物の焼肉が食べれるらしい。私も一度は訪ねてみたかったのだが、周りにいるケニア人の友人は誰も私の誘いに乗ってくれなかった。「なんでそんな肉食べてみたいの？牛肉やヤギ肉が一番おいしいって！」

見たことがなくても、食べたことがなくても興味がないケニア人。今、知っていること、食べているものがベストだと信じている姿。一方、外国人の、何でも知りたい、聞きたい、食べてみたいという欲求は確かにケニアを観光大国にした。外貨を稼ぐ手段として政府もその運営・保全に力を入れている。また観光業で生計を成り立たせているケニア人も多く、日本語を始めいろいろな外国語を自由に操るガイドも多い。

ただその反面で、自然と人間のお互いに干渉しない関係が外からの圧力で崩れてきたのではないかと思わざるを得ない。希少な象牙、鉱物資源、森林、野生動物。知らないものを知りたいという好奇心は、それとの調和をどんどん奪ってゆく。しかも、ケニア人ではない手で。しかし、それらは彼らにとっては外貨を約束してくれる。「経済と環境の調和」の間

題は、資本主義が抱える世界中どこにでもみられるありふれた問題ではあるが、これからも手付かずだった自然がアフリカからも消えていくことに何も感じないというわけにはいかない。

ただ、「経済よりも環境を優先しよう」という声は、衣食住が足りている先進国の声であることが多い。先日ディスカバリーチャンネルの、ある番組で、西アフリカのカメルーンを扱ったものがあった。首都のあるレストランは、伝統料理であるゴリラの肉を使ったシチューを出している。しかし、政府は野生動物の肉を食べることを廃止しようとしている。理由は、旧植民地政府であったフランスにある環境団体が「野生のゴリラの数が減っていることに憂慮しての措置であり、保護している」ということである。

ゴリラを代々捕獲してきたある部族の村人は、

「ゴリラは増えすぎると森林に餌がなくなり、周辺の田畑を荒らすようになる。それを防ぐためには、食肉用として殺すことを伝統的にしてきた。」そのフランスの NGO の職員はこの村に入り、「いかに野生動物を保護していくのが大切か」を村人に説いている。しかし、作物を荒らされた村人は訴える。「唯一の畑の食べ物がゴリラによって荒らされた。どうやった子供を食べさせればいいのか？あなたはそれを教えてくれない。」

アフリカの人々は、自分たちの方法で自然環境と調和してきた伝統と歴史がある。そうするには理由があるのだ。衣食住を満たされた先進国の人々が、美しい価値観を押し付けてはいけないと思う。そもそも先進国の豊かな生活こそ、途上国の資源・自然を奪うことで成り立っているものであるのだから。